

谷崎潤一郎「台所太平記」論

——食を媒介とした女中と磊吉との交流

猪口洋志

はじめに

「台所太平記」は『サンデー毎日』の昭和三十七年十月二十八日号から昭和三十八年三月十日増大号まで二十回にわたり連載され、昭和三十八年四月に中央公論社から刊行された。連載が始まる一週間前の『サンデー毎日』昭和三十七年十月二十一日号で谷崎は次の文章を書いている。

週刊雑誌に物を書くのは今度が始めてではない。嘗て週刊新潮に「鴨東綺譚」を載せたことがあるが、事情があつて中絶した。その後週刊公論に、「当世鹿もどき」を書いたので、今度が三度目の経験である。サンデー毎日には随分前から小説を書く約束をしてゐて、長い間果たさずにゐた。

実は週刊誌にはどう云ふものが向いてゐるか、ちよつと見当がつかなかつたし、「鴨東綺譚」で失敗したこともあるので、簡単に書き出せなかつたのである。^①

「鴨東綺譚」の失敗というのは、(モデルのプライバシー問題として抗議があつたため)^②六回で中断したことを言っている。本作にも次のような記述がある。

実際にあつた人たちのことを、その通り記載するのが本意ではありますけれども、やはり小説を書くつもりで書くのですから、幾分の潤色を加へてゐないとは申せません。ここに書いてある事柄が、何から何まで本当の事実そのまゝであると云ふ風に取りられましたは、磊吉もモデルの人々も甚

だ迷惑いたしますから、その辺はくれぐれも含んでおいて戴きます。(第一回)

このように、作品の中でも〈潤色を加へて〉いるとして、〈モデルのプライバシー問題〉が生じないよう配慮している。「鴨東綺譚」以前にも、昭和九年に発表した「夏菊」では谷崎の三人目の妻松子の前夫であり、〈モデルと見られる根津清太郎側からの申し出で、二十八回で中止〉³⁾に追い込まれていることもあり、作者は慎重になっているのである。本作も最初の草稿から発表までの間に三年という時間が経過している。そこには作者の病気によってやむを得ず中断した側面もあるが、以前の「鴨東綺譚」のことが頭を過って週刊誌のための連載が先に進まなかった側面も否定できない。

本作は千倉磊吉が、昭和十一年から三十七年までの間に雇った「女中」の中から数人の娘を組上に載せているものである。本作に登場する女中は二十人を超えているが、名前が紹介されるだけの女中もいれば、詳述されている女中もあり、千差万別である。森安理文は〈この作品は小説とはいっても、かなり谷崎自身の女中に関する私的な生活記録ととれるわけである〉⁴⁾と述べている。(実際にあつた人たちのことを、その通り記載す

るのが本意)なのであるが、〈モデルのプライバシー問題〉もあり、小説の形を借りて述べているというわけである。本作の梗概は次のとおりである。

小説家の千倉磊吉は二度目の妻讚子との結婚を機に一戸を構え、女中を雇うようになった。昭和十一年から現在に至るまで、十年を超えて雇う者もいれば二三日で辞めていく者もありさまざまである。数えきれない千倉家の女中たちの中から特に印象深い数人の娘が紹介される。磊吉の喜寿の祝いに新旧の女中が勢ぞろいしたところで話は終わりを迎える。

本作を創作していたとき、作者谷崎は満年齢で七十六歳になつており、右手が不自由なため秘書に口述筆記をさせている。本作の同時代評として、平野謙が次のとおり述べている。

「台所太平記」は、いわば「細雪」という豪華な物語の成立を黙々とささえてきた下部構造ともいうべき、しがない女中列伝にほかならない。(中略)前者と後者との題材上の相違は、やはり私は二十年という歳月の作者にもたらした生理的衰退をよみとらずにいられない。⁵⁾

平野は本作を「細雪」と比較して論じている。確かに「細雪」

と本作とは〈題材上の相違〉があり、平野はその理由を作者の〈生理的衰退〉と論じているのである。一方で、武田寅雄は〈女性心理の機微〉に〈鋭い観察〉があるとし、〈永年の修練〉によつて、〈一人一人の人物が生き〉ており、〈ユーモアに富んでいゝという見解を示している〉。〈生理的衰退〉を読み取つた平野謙とは異なり、〈本格的な作品〉と判断している。さらに、谷崎の伝記作者である野村尚吾は次のように述べている。

戦後の二十五年から、京都の潺湲亭と熱海の雪後庵の二カ所に適宜住むようになったため、家事を手伝う女中が倍増した。常時七八人を雇つていた。若くて潑刺とした女性が、家に大勢いることは、なんといいても家の内が花やぐし、いろんな性質の若い娘に取り囲まれている雰囲気が好きだったので、熱海の雪後庵だけになつてからも、その数はあまり減らなかつた。入れ替り立ち替りする、そうした女中が、引きおこす恋愛やトラブルをユーモラスに描いているのである。⁽⁷⁾

野村も〈ユーモラスに描いている〉と述べており、武田の評とあわせ、ユーモア小説という評価が共通している。

また、陳齡は、〈昭和三十七年十一月から翌三十八年五月までの間に書かれた谷崎の書簡五通〉を紹介している。⁽⁸⁾ 谷崎は〈お手伝いさん不足の状況〉に陥つており、〈お手伝いさんの紹介を依頼するのが主旨〉の書簡で、〈一人や二人でもお手伝いさんが来て助けてくれればと渴望する谷崎の限りない哀愁と寂寥が伝わってくる〉としている。ところが、谷崎の「昭和三十七年三月二十三日」の日記には、〈新潮社から揭示板に応募した娘さん達の履歴書が六七十通到着する〉⁽⁹⁾とあるように、『週刊新潮』の「揭示板」に谷崎自身が書いた〈お手伝いさんを探しています〉⁽¹⁰⁾という記事に対する反響は大きく、決して〈お手伝いさん不足の状況〉とは言えないのである。谷崎が書簡五通を出した理由については後述する。

谷崎は「昭和三十七年八月一日」の渡辺千萬子にあてた書簡の中で〈文章上のことも是非注意して下さい、もう少し滑稽味を加へて書いてはいけないでせうか如何と書き、さらに、〈九〉の初めから書き直して〉いる。田辺俊建はこの書簡に着目し、第九回以降に〈滑稽味〉が加わっていると指摘している。⁽¹¹⁾

さらに、福田博則は〈「台所太平記」は全二十回のうち、「癡癡老人日記」執筆に至るまでに連載分にして四回途中までが書き進められていた〉⁽¹²⁾ことに着目し、〈「癡癡老人日記」を間に挟

んで分けられる前半と後半ではその様相を別にし、それぞれが別の意図を持つているものである」と主張している。福田によれば、「当初の意図」とは「ユーモアによる醜化と作品の保護」であり、「後の飛躍」とは「これまでは脇役であった磊吉がうってかわって前面に登場し、積極的に女中との交流を行うという点」にあると主張している。

本稿は、田辺が言う第九回以降に滑稽味が加わっているという点、及び、福田が言う磊吉と女中との関係に変化が生じているという点に異論を唱える。さらに、本作はユーモア小説にとどまるものではなく、磊吉が女中に抱く慈愛の思いを描いている作品であることを主張するものである。

一 成立過程——三年前に書き始められた草稿

谷崎が女中についての小説を描くことを発想した経緯について、田辺俊建は「高齢と狭心症発病以来臥床がちとなり、加えて視力低下で書見、テレビ視聴も安易ではなく、このような行動の制限があつては取材が思うに任せず、知り得る情報の多くは家庭内の事件が中心」にならざるを得ないため、「家庭内で立ち働く女中を素材とした」と分析している¹⁹。さらに、森安理

文が言うように「この作品は小説とはいっても、かなり谷崎自身的女中に関する私的な生活記録ととれるわけであ」り、事実と重なる部分が多いと考えられるのである。情報源として入手できるものが身の回りの女中しかないのであるが、身近な人物である女中をモデルにするからには、プライバシーの問題が生じないよう表現に慎重になる必要があつたのである。

そのような経緯で発想され、執筆が開始された本作は、成立までに三年以上の時間が経過している。そこでまず、谷崎自身の日記や当時谷崎の周辺にいて谷崎の日常を見ていた人物の著書を参考にしつつ、本作の成立過程を追うこととする。最初に着目するのは、本作が発表される三年前の昭和三十四年である。昭和二十八年から、谷崎作品の口述筆記をしている伊吹和子によれば、昭和三十四年の「十月に入ると、後の『台所太平記』の草稿「女中列伝」の筆記が始まった²⁰」とあり、「当初は『夢の浮橋』に続く創作は『台所太平記』になる予定であつた」とある。また、昭和三十四年の年末には「女中列伝」の草稿を再開、題名は「女中綺譚」と改められた」とあり、続いて、昭和三十五年の「一月九日、名古屋旅行（？）の翌日から、早速「女中綺譚」の続きが始まった」とある。関連の記述が出てくるのは次の箇所である。

先生は、このところ雑事が多いから、その間を利用して、「女中綺譚」に出てくる鹿児島生れのお手伝いさんの故郷の枕崎まで、一度取材に行つて来てほしいと言いながらも、やはり、毎日少しでも原稿を書かないと落着かない、あなたがいないというのも不便だし、と、決心がつきかねておられた。そして、何となくごたごたしてしまつた、初めからやり直そうということになり、二月十一日の午後から、題名も「台所物語」と改めて、原稿用紙に新しく口述が始まつた。¹⁶⁾

昭和三十四年に始まつた「女中綺譚」の執筆であるが、昭和三十五年二月に題名を「台所物語」と改め、最初から書き直しているのである。「台所物語」の執筆は次のとおり続いている。

進行は順調で、十六日(昭和三十五年二月十六日。引用者注)には第一回掲載分を十五枚余で終了し、その日すぐ第二回目の分を二枚半、十九日に第二回分十五枚を了り、二十七日には第三回分の終りまで、合計四十五枚が完了した。引き続き日曜日でも休まずに、閏年であつたこの二月、月末

二十九日には五十五枚目まで進んでいたから、先生の健康状態がこのまま保たれていれば、あるいは『台所太平記』の完成はもっと早まり、「サンデー毎日」への掲載も早期に実現して、題名も違つていたかもしれない。¹⁷⁾

伊吹の著書によると、以上のような経過をたどつていゝ。ところが、谷崎の日記では少し事情が違つていゝのである。

谷崎の「昭和三十四年九月十二日」の日記には、「女中綺譚」第一稿開始二枚余進行¹⁸⁾とあることから、伊吹の言う「十月」よりも早い(九月)から執筆が始められていゝし、題名も伊吹の言う「女中列伝」ではなく、最初から「女中綺譚」となつていゝ。続いて、谷崎の日記「昭和三十四年九月十九日」には、(原稿十九枚目書き直し一枚余進行)とあり、翌日の「昭和三十四年九月廿日」の日記では、(軽い仕事以外は頭をつかふことはやめた方がいゝ、とのことなので、暫く仕事を休むことにした)となつており、「女中綺譚」の執筆は「昭和三十四年九月十九日」で中断していゝ。「女中綺譚」は(縦二五六ミリ×横一七九ミリ、「極東ノート」といゝB5判横野の大学ノートに万年筆で記してある。表裏に記入して、二〇枚。筆記者は伊吹和子。¹⁹⁾)とある。「女中綺譚」は「台所太平記」第三回の半ばに相当する箇

所で終わっている。全集の「台所太平記」の「解題」では、(十)月より少し早くに取りかかり、その折の題名は「女中列伝」ではなく、「女中綺譚」だったことがわかる⁽²⁰⁾とあり、伊吹の著書よりも谷崎の日記の方に信頼を寄せていることがわかる。さらに、伊吹が主張する昭和三十四年の年末と昭和三十五年一月九日の再開について、谷崎の日記には記述がない。

続いて、翌年の「昭和三十五年二月十一日」の日記では、「台所物語」原稿開始、三枚余進行⁽²¹⁾とあり、題名を変更して、最初から書き直して執筆を開始していることがわかる。

「台所物語」に関しては、「昭和三十五年二月廿九日」の谷崎の日記に、「原稿五十五枚後半まで進行」と記述があり、日付も枚数も両者の記述は一致している。翌日の「昭和三十五年三月一日」の日記には、「朝ちよつと工合悪く中沢先生に來診を求める、その後軽い発作を起す」とある。この日の様子について、伊吹和子は次のとおり記している。

その朝先生が、ひどい頭痛を訴えられたので、昼前にホームドクターの中沢先生が往診、一応の処置が終って玄関で靴を履いておられる最中に、今度は全身に激しい痙攣が起って意識がなくなり、寝室にとつて返した中沢先生の手

当で、ようやく一命をとりとめられた⁽²²⁾

谷崎の日記では病気の重大さを認めることができないが、伊吹の記述によれば深刻な状況であったようである。この後、「台所物語」の執筆は中断している。

執筆が三たび開始されるのは、「瘋癲老人日記」の完成を挟んだ昭和三十七年のことであり、題名も「台所太平記」に改められている。すなわち、「女中綺譚」から「台所物語」を経て「台所太平記」までの間に三年の歳月が流れているのである。間隙が生じた理由について伊吹は次のように述べている。

先生の健康上の理由と、追悼文など緊急を要する依頼が突発的に入ったこと、それらに触発されて新しい作品の構想が別に浮かび、一時そちらへの関心がより強くなった、というような事情、それに、原稿料の必要等がからんで、『三つの場合』『当世鹿もどき』『瘋癲老人日記』その他が、『台所太平記』執筆中に挿入された形になったのである⁽²³⁾。

本作には、千倉磊吉という作家が登場する。多分に作者である谷崎を思わせるところの人物造形がなされているが、磊吉は本

作の語り手となっていない。谷崎の「昭和三十七年五月十五日」の日記に次のような記述がある。

本日よりサンデー毎日のために「台所太平記」を書き始める。これは前に少し書いたことがあるのでそれを再び書き起すことにする。但し主人公を第一人称で書くことを止めて、第三者が書く体裁にする。六枚進行^②。

自分がモデルとなっている磊吉を「私」という一人称で書くスタイルから、第三者が書く体裁へと変化させたことにより、モデル問題に対する不安からも解き放たれたのか最後まで一気に書き上げることになる。なお、「昭和三十七年十一月二十日」の日記で〈正午までに台所太平記を全部脱稿する〉という記述が見え、『サンデー毎日』昭和三十七年十月二十八日号で連載が始まってすぐに脱稿していることがわかる。

二 決定稿に至るまでの経緯

昭和三十七年に書き始めた「台所太平記」は、昭和三十四年の「女中綺譚」、三十五年の「台所物語」と比較してどの程度

変化しているのであろうか。「台所物語」は現在確認することができないため、比較の対象は全集に全文が掲載されている昭和三十四年の「女中綺譚」とする。次に掲げるのは、女中がへどこかへ出かけて行くのを、〈二階から見下し〉て肢体を観察する磊吉の姿が描かれている場面である。

肩だの、腕だの、胸だのに十分な厚みがあり、脚など、肉づきがよくて、而も少しも曲つてゐず、靴を穿いた足もとなども素晴らしい感じでした。それに、彼女は感心なことに、常に身綺麗でたしなみがよく、至つて清潔にしてゐました。磊吉は足の裏の汚れてゐる女が嫌ひでしたが、初はいつでも雑巾で拭いたばかりのやうな、サラリとした、真つ白な足の裏を見せてゐました。襟もとを上から覗き込んでも、肌着が垢づいてゐたことはなく、洗濯したてのさつぱりしたものを着てゐました。(第二回)

この部分の草稿である「女中綺譚」の本文は次のとおりである。

「肩や腕や胸に」肩だの腕だの胸だのに十分な厚みがあり、脚など、肉づきがよくて、「しかも」而も少しも曲つてゐず、

靴を「は」穿いた足もとなども素晴らしかった。(挿入2、挿入3)／／(挿入2)それに感心なことには、身綺麗で身だしなみがよく、至つて清潔にしてゐた。私は足の裏の汚れてゐる女が嫌ひであつたが、彼女は常に雑巾で拭いたばかりのやうなキレイな足の裏をしてゐた。／／(挿入3)襟元を上から覗き込んでも、肌着「に」が垢づいてゐたことはなく、洗濯したてのさつぱりしたものを着てゐた。²⁵

決定稿と草稿とを比較すると、内容に変化は見られない。

また、次に掲げるのは、作品の冒頭部であり、女中の呼び方を呼びつけから「さん」づけに変更したことに言及している箇所である。

近頃は世の中がむづかしくなつて参りまして、家庭の使用人を呼びますにも、「女中」など、呼びつけにはいたしません。昔は「お花」「お玉」と云ふ風に呼んだものですが、今では「お花さん」「お玉さん」と、「さん」づけになりました。／千倉の家は至つて旧式でしたから、ついこの間まで呼びつけにしてをりましたが、注意する人がありましたので、やう／＼去年あたりから「さん」を付けるやうにな

りました。(第一回)

この部分が「女中綺譚」には次のように書いてある。

近頃は世の中がむづかしくなつて、「奉公」家庭の使用人を呼ぶのにも、「女中」「と」など、呼び「捨て」つけに「してはいけないさうである。」せず、必ず「さん」「附」づけにしなければいけないさうである。だから名前を呼ぶのにも、「お花さん」「お玉さん」と云ふ風にしなければいけない。「。」と云ふ。私の家など「一オ」(第一頁表のこと。引用者注)は旧式だから、ついこの間まで呼びつけにしてゐたが、「そんな風習はお改めなさい」と注意してくれる人があつたので、つい今年の夏頃から「さん」をつけることにした。

ここにおいても、決定稿と草稿との間には、内容の変化が見られないと言ふことができる。

本作の草稿である「台所物語」の〈原稿五十五枚〉分が連載四回分に相当しており、昭和三十四年の「女中綺譚」と「台所太平記」がほぼ同じ内容を持つ文章であることから、その間に

挟まれた昭和三十五年の「台所物語」も同様に「台所太平記」と内容に差がないことが類推されるので、「台所太平記」第四回までは「瘋癲老人日記」成立以前にすでに完成していたということができる。

第一回から第四回までが三年前に書かれた草稿と同じ内容の文章で綴られているのに対して、第五回以降は昭和三十七年になって新たに書かれた部分である。谷崎の日記には「昭和三十七年五月二十三日」に〈原稿三枚進行。これで台所太平記（四）を脱稿する〉とあり、続いて「五月三十一日」の日記に〈台所太平記（五）を書き始める。原稿二枚進行。〉と書いてある。

昭和三十五年に「台所物語」が中断したのは、谷崎の〈全身に激しい痙攣が起って意識がなく〉なるような重大な事態に直面したためであった。また、再開までの間にも、「昭和三十五年十月十六日」の日記では、〈上田先生来診、やはり軽い狭心症の発作と診断され、暫く様子を見た上で東大病院へ入院することになった。泉田先生来診、泊つて貰ふ〉というような記述が見受けられ、体調面で万全ではない時期であることを伺うことができる。

「瘋癲老人日記」のヒロイン颯子のモデルと言われている渡辺千萬子と谷崎との間には頻繁に書簡が交わされていた。二人

の書簡の中には「台所太平記」に関するものも多く含まれている。次に記すのは、「昭和37年8月15日」に千萬子から谷崎に発せられた書簡で、「台所太平記」の映画化について千萬子が意見を述べている箇所である。

「台所太平記」の映画化のこと、電話でも申しましたやうに向いてゐないとは思ひません。まづ脚色者、監督者をえらぶ方がい、と思ひます。（中略）「磊吉」を狂言まはしにしてたん／＼と物語を展開して行けばと思ふのですが、そんなの観にくる人あるかしら？ まうからないでせうね。⁽²⁶⁾

千萬子が谷崎に送った書簡の中で、「磊吉」の役回りについて助言を行っている。それに対して谷崎は「昭和三十七年八月一日」の日付の書簡で次のように述べている。

「磊吉」は私がモデルなので、なるべく中心人物にしないやうにするつもりでしたが御指示にしたがひ彼を狂言まはしにするやうに今（九）の初めから書き直してゐます コ
ンナコトも君でなければ思ひつきません

谷崎は（九）の初めから書き改めていると書いている。第八回を書き直している事実がわかる資料として、再び谷崎の日記に注目してみたい。谷崎の「昭和三十七年八月十三日」の日記に「〈台所太平記〉（九）の原稿を書き始める。四枚半進行」という記述が見える。以下、「十四日」には「原稿四枚進行」、「十五日」には「原稿二枚半進行」、「十六日」も「原稿二枚半進行」、「十七日」は「原稿四枚半進行」、そして、「十八日」には「原稿四枚進行、（九）を書き終る」とある。合計すると原稿二十二枚となる。

谷崎の日記において、始めと終わりが明確な回を取り上げて、その間に原稿が何枚進行しているのかを調査すれば、連載一回あたりの枚数がわかる。日記によれば、第五回、第十一回、第十二回の枚数が明らかで、それぞれ計算すると、第五回は十七枚、第十一回は十七枚、第十二回は十五枚となり、第九回の二十二枚は多いことがわかる。このことから、日記には（進行）と書いているが、実は（書き直）しの箇所が含まれていると想像できる。千萬子への書簡の日付である「八月十七日」に（今（九）の初めから書き直してみます）とあることから、同日の谷崎の日記にある（四枚半進行）が「四枚半書き直す」という意味であるならば、二十二枚から四枚半を差し引いて十七枚半となり、

他の回の原稿枚数とはほぼ一致する。

次に、（九）の初めから書き直し）ていて、第八回以前を（書き直し）ていない理由について解明する。谷崎の「昭和三十七年七月二十六日」の日記を見ると、（サンデー毎日の原稿五、八までを今朝野村氏に発送する）と書いてあり、また、「八月十一日」の日記では、「〈台所太平記〉（五）〜（八）までのゲラが出来て来たので校正する」とある。よって、千萬子の「8月15日」の書簡が谷崎のもとに到着したときはすでに第八回以前に関しては書き直すことができない段階にあったと考えられる。

さらに、谷崎が（書き直し）たと言っている内容については、（狂言まはし）の役を割り振られた磊吉が一人称の「私」を急に使用するという変化が生じることなく、語り手は第八回までと同様に、作中人物を磊吉、小夜、梅などと固有名詞で呼んでおり、明瞭な変化は見受けられない。原稿枚数の多さから、第九回を書き直していると推測することができるのであるが、修正内容について特定することはできない。

三 本作を前半と後半に分割する先行研究

本章では、二編の先行研究についての分析を試みたい。まずはじめに、第九回から滑稽味が生じたとする田辺俊建の研究について取り上げる。田辺は谷崎が「磊吉」は私がモデル」と告白している「昭和三七年八月一七日」の千萬子あての書簡の中に「文章上のことも是非注意して下さい、もう少し滑稽味を加へて書いてはいけないうか如何」と書いていることに着目し、第九回以降、滑稽味が加わっていることを指摘している。ここでは、田辺が滑稽味が加わったと指摘する場面を検証する。

第九回は磊吉の逆鱗に触れて解雇された小夜と、小夜を慕って自ら磊吉のもとを去った節の「同性愛現場の発覚の場面」が描かれている。小夜が磊吉の逆鱗に触れたのは、磊吉の机の抽斗を開けて鉛筆を使い、〈勝手に一本使はせていたゞきました〉と書いた紙片を抽斗に入れておいたことが原因である。節は小夜を解雇した磊吉に反発し自ら千倉家を辞し、二人は蒲生家で一緒に働いていたのであるが、次に記すのは、〈自分のベッドで行われていた事を知った蒲生夫人の行動〉である。

窓から首を出してベツベツと唾を吐いて、ベッドの掛け布団をさも不潔さうに指の先で摘み上げて、庭へ放り出した。(中略) クシヨンだの、シートだの、マトレスだの、いろ／＼なものが二階から外の芝生へ降つて来ました。(第九回)

田辺は、上記の場面について、〈明らかに喜劇的なデフォルメが感じられる〉として、〈滑稽味を加えた描写やエピソード〉が使われていることを指摘する。田辺は第十回の駒の描写についても〈楽しい挿話〉が描かれていると指摘している。

奉公に來ました当座は、牛肉に触ることが出来ませんでした。どうしても自分が肉を切らされる番になりますと、タオルで猿轡を蔽めたやうに口と鼻を蔽つたり、狂犬が蔽めるやうな道具を口に蔽めたりしまして、片手に一番長い肉切庖丁を持ち、片手にこれも長い／＼菜箸を持つて遠くの方から肉を押へ、まるで敵討ちにでも出かけるやうな仰山な扮装をします(第十回)

第十一回以降も滑稽話は続くと田辺は指摘するが、そもそも千

萬子が書簡の中で「磊吉」を狂言まはしにしてたん／＼と物語を展開して行けばと思ふのです」と書いているのは、「台所太平記」の映画化に関する意見なのであって、小説ではない。ところが、それを谷崎が「磊吉」は私がモデルなので、なるべく中心人物にしないやうにするつもりでしたが御指示にしがひ彼を狂言まはしにするやうに今（九）の初めから書き直してゐます」と受けており、そこから混乱が生じているのである。小説において、「磊吉」を「狂言まはし」にすることに千萬子は言及していないし、谷崎も千萬子の「狂言まはし」という表現を借りてはいるものの、磊吉の役割に変更を加えた形跡はない。とすれば、谷崎が（九）の初めから書き直ししたのは、田辺が指摘するように滑稽味を加えた点にあるのであろうか。

第二回の初の登場する場面に次のような記述がある。（とき／＼千倉家へ遊びに）やってくる青年が、（或る日、夏の晩の十時過ぎ頃）、（ふと勝手口から這入つて参りますと、女中部屋が一杯に開けつびろげてありまして、電燈が煌々と点けつばなしになつてゐる下で）のできことである。

連中がしやべりくたびれて一人残らずグウグウと鼾を掻いてゐました。中でも初が、かの偉大なるモンロー以上のバ

ストをはだけて、大福餅が積み重なつたやうになつた女体の群の上に蔽ひかぶさつて寝てゐますのを、否応なしに見てしまひました。（第二回）

（大福餅が積み重なつたやうに）眠っている女中の姿は滑稽と呼ぶにふさわしい。さらに、梅と駒が（主人から暇を貰つて町へ映画を見に出かけ）たとき、（駒が映画の場面に感動の余り声を挙げて泣き出し）てしまつた場面は次のとおり描写されている。駒には（奇態な癖があり）、（何事に依らず不快を感じますと、途端にゲーツと吐き気を催）し、しかも、（とても仰山な、大きな声で、ワーツと怒鳴るやうに云ふ）のである。

時には例のゲーツと云ふ音も交ります。その度毎に近所の客がびつくりして駒の方を振り向きませす。（中略）梅はプリップリ怒りながら絵を見てゐましたが、どうした加減か駒の鳴き声に感染して彼女も悲しくて溜らなくなり、急にワアーツと大泣きに泣き始めました。そしてその映画が終るまで、二人の派手な泣き声が彼方と此方とで場内に響き渡りました。（第六回）

（二人の派手な泣き声が彼方と此方とで場内に響き渡）るという表現には、滑稽味があり、第九回以降に限定されたことではないことがわかる。書簡から推測するに（もう少し滑稽味を加へて書）こうという意志があり、（九）の初めから書き直したものと考えられるが、第八回以前についても滑稽味のある表現での描写があり、第九回以降にかぎったことではないとわかる。

次に、磊吉と女中との交流の有無の観点から見た福田博則の研究について分析する。福田は本作後半部分の特徴について、〈磊吉は女中たちとの交流によって心を慰められ〉ているとし、〈鈴〉に読み書きを教えることで心の憂さを晴らしたり、驕慢な「百合」を相手にすることで気を晴らして見ると言う。⁽²⁸⁾ここで、福田が指摘する鈴と百合の描かれている姿を見ていくことにする。まず、鈴について見てみると、〈辺陲の土地に育つて十分な教育を受ける機会に恵まれなかつた〉ため、〈文字に閑してはあまりに知らな過ぎ〉たのである。

彼女は驚くほど漢字の知識に欠けておりました。（中略）ですから差当り、巧拙などは問ふところではなく、少しでも多く字数を覚えさせることが大切でしたので、毛筆の稽古は

二の次としまして、鉛筆で毎日々々、新しい字画を書かせるやうに努めました。（第十一回）

漢字の知識に欠ける鈴に対して、磊吉が熱心に教育をする情景が描かれている。

次に、磊吉のお気に入りである百合についてである。磊吉は女中の中で百合との散歩を好んでいたという。

磊吉が誰にも増して彼女と散歩したがりしたのは、彼女が一番朗かで、快活で、主人に対して無遠慮だったからでした。（中略）百合は面白いことがあれば自分の方から進んで話しかけ、時に依つては磊吉を冷やかしたり交ぜつ返したりして、退屈させることがあります。（第十五回）

それほど美人という訳でもない百合と散歩をしたがるのは百合の無遠慮なところがあるからなのである。

磊吉が鈴や百合と交流する姿について、福田は〈前半の「初」を相手にしている時の磊吉とは別人の趣きが強い〉と結論づけ、次のように述べている。

前半では、磊吉と「初」の距離は極めて意図的に間が保たれ、「初」の性的な部分は描かれるものの、それに磊吉は直接的には関わっていないかった。しかし、後半部分では磊吉は女中に積極的に関わり、「瘋癲老人日記」と同じく、女性に生きがいとしての存在を見出す。⁽²⁹⁾

ところが、磊吉と初との交流を描いている箇所を見ると、磊吉の心は初によって慰められているように思われ、前半と（別人の趣きが強い）とは言えない。

天気の良い日には、磊吉は庭の芝生へ籐椅子を持ち出して初に頭を刈つて貰ふことがありました。セツカチの磊吉は床屋で待たされるのが嫌ひで、頭は自宅で刈ることにしてゐるのですが、初が来ましてからは、散髪は彼女の役目に決つてゐました。バリカンでなく、鋏でチヨキチヨキやらせるのですが、最初は虎刈りでしたが、次第に熟練して上手に刈るやうになりました。（第四回）

昭和十九年の秋、〈田舎の母が病氣だと云ふ知らせを受け〉た初は〈帰る二三日前に、磊吉は当分の間のお別れに散髪をして

貫〉つたのである。

その日は何だか戦争らしくない、のんびりとした麗かな天気で、庭の午後の日光を一ぱいに浴びた初の顔が、際立つてくつきりと見えたこと、鋏の音がいかにも爽やかにパチリパチリと聞えたことが印象に残つてをります。（第四回）

こうした記述を見ると、磊吉と初は長く深い交流を保っており、磊吉は初に心を随分と慰められていると考えられる。よつて、福田が主張しているように〈磊吉は女中たちとの交流によって心を慰められ〉、〈女中に積極的に関わり〉、〈女性に生きがいとしての存在を見出す〉ことが、初の登場する前半にはなく、鈴や百合の登場する後半にあるとは言えない。

田辺、福田は本作を二分割することによつて理解しようという見解であるが、詳細に分析すると、二分割される作品ではなく、〈滑稽味〉も〈女中たちとの交流〉も作品を通じて一貫して流れていると言ふことができる。

四 食を通じての女中との交流

本作の題名は「台所太平記」であるが、昭和三十四年の草稿の段階では、「女中綺譚」であった。女中について書くことは念頭にあったと考えられるが、その後、昭和三十五年の草稿段階では、「台所物語」へと変わっている。女中に関する話の中でもとりわけ台所を中心にした話に関心が集約していったのだろう。台所は食を中心にした生活空間であり、女中との交流の中でも、食を媒介にした交流への関心が強まったと想像できる。女中との交流、とりわけ食を媒介にした交流への関心が高い理由を作者谷崎の随筆をもとに考察を加える。

谷崎は東京府立第一中学校の時に、家庭の経済事情から二年への進級を諦めなければならなくなったのであるが、成績が優秀であったため、先生の斡旋で北村家に書生兼家庭教師として住み込むことになった。〈幼い頃のことを思ひ出して〉、〈一と晩ぢゆう、おちく／＼眠れ〉なかった谷崎は、〈昔は自分が「坊ちゃん」とかしづかれて、乳母日傘で毎日を暮し〉ていた頃の事を思い出し、〈無闇に悲しくつて涙が出て仕方が〉なかったと語っている⁽³⁰⁾。谷崎が北村家に奉公をしていたのは〈明治三十五年の夏から四十年の夏まで、ちやうどまる五年〉であつ

たが、その間に一中を卒業し、一高に入学している。

手前共でも二人や三人の若い人々に手伝つて貰つてをりますが、さう云ふ人々の様子を見ます度毎に、手前はいつも自分が書生奉公をしました当時を思ひ出すのでございませう。／＼卑しいことを申すやうでございませうが、奉公をしてをりますと、御主人たちが始終旨さうな御馳走を食べてをられますのが、羨しくつて溜らないもんでございませう。その羨しくつて溜らない心持、何とかして自分もあんなものを鱈腹食べてみたいと云ふ喰ひしん坊の心持、あの心持は、奉公をした経験のない方には恐らく想像がつかますまいな。⁽³¹⁾

谷崎が書生奉公をしていた〈落ちぶれ〉た時代は〈無闇に悲しくつて涙が出て仕方が〉なかったと言う。そうして現在、女中を見ると書生奉公の時代を思い出すのであり、谷崎が女中に抱く感情には特別のものがあると想像できる。

本作には、千倉稲吉が食を通じて女中と交流する場面が描かれている。そこには慈愛の思いがつきまとうのである。

その時分、阪神間の食糧事情は日増しに困難になつてゐましたが、熱海と軽井沢は特別な別荘地として比較的物が豊富でしたから、食ひしんぼうの磊吉は毎日のやうに初を促して、別荘に鍵をかけて西山の坂道を街へ下りて行き、何か彼にか食ひ物を漁りました。八百屋の店に生若布が一ぱい積んであるのを見つけて、／＼「初や、あれを買つて行かう」／＼と、初に買はせて帰つて二杯酔にしました時の、その新鮮な生若布の旨かつたことは、磊吉は今も忘れられません。／＼「熱海には何でもございますね」／＼と初も感心しながら、至るところの店先に立ち止つて買物籠をひろげ、やたらに物を買ひ込みました。(第三回)

〈初は田舎へ帰りましても〉、〈重労働に服さなければな〉らず、〈芋を常食にして〉おり、〈真つ白だつた皮膚が僅かの間に日に焼けて濃いセピア色にな〉つた。磊吉は〈僅かの間に別人のやうに変わり果てた初を眺めて憫れ〉ますにはいられなかつた。そのため、〈生若布が一ぱい積んである〉〈八百屋の店〉で「熱海には何でもございますね」と話す初に磊吉は愛おしさを感じるのである。

梅は初の弟安吉と結婚した。安吉は〈少年時代から鰹船に乗

り込んで稼いでゐた。

鰹船の機関長に出世してゐた亭主の安吉は、どうかすると鰹を追ひかけて静岡県下の焼津港に碇泊することがありました。そんな時には必ず大きな鰹を一尾、土産に提げて熱海へ立ち寄つてくられて、妻や子供たちの様子を話してくれました。磊吉たちはその顔を見ますと、梅のことを思ひ出すばかりでなく、面影が何となく姉の初に似てをりますところから、初のことと思ひ出さずにはゐられません。で、毎年鰹の季節になりますと、今年も寄つてくれるかなと、心待ちにしてゐたものですが、やがてだん／＼来ないやうになりました。察するところ、鰹船は日本の沿岸より支那海から印度洋方面へ行くことが多くなつたのでせう。(第六回)

〈鰹船の男を亭主に持つて〉〈その男に死なれ〉るという例は（い）くらかもあると云ふ話）なのであるが、〈南支那海まで遠く漁場を求め〉、〈いつ永久に帰らなくなるかも知れ〉ない夫の帰りを待つ梅の淋しさを考えると磊吉は溜らない気持ちになるのである。

「生れつき味覚が発達して」いた鈴については、次の話が紹介されている。

多分冷菜の海月だの、皮蛋だの、スープの燕巢だの魚翅だの東坡肉だのと云つたやうなものだつたでせう。鈴は夫婦がさもおいしさうに食べてゐるのを眺めまして、世には不思議な喰ひ物もあればあるものと感心してゐますと、讀子が小皿と小鉢の上へそれらの料理を少しづつ、蓮華で取り分けて、／「鈴や、あんたこんなものは食べたことがないだらう、まあ、ちよつとこれを食べて御覧。台所へ持つて行くとみんなが見るから、こゝで食べて御覧」／と、云ひました。／さう云はれて、鈴は生れて始めて中華料理と云ふものを口にした訳ですが、その旨かつたこと、云つたらなかつた、いつたい世の中にこんなにもおいしいものがあるだらうかと思つたさうで、その時の驚きをいつまでも／＼人に語つて已みませんでした。(第十一回)

「生れて始めて」食べた中華料理の味を鈴はいつまでも忘れることができなかった。福吉は鈴においしい物を食べさせてやりたいと考えるとともに、今までおいしい物を食べることができ

なかつた鈴の境涯を考えると哀れに思えてくるのである。

本作の最終回である第二十回には、女中奉公をしようという者がいなくなった現状について言及されている。

昨今の娘さんたちは皆会社の事務所や工場へ好条件で招かれて行きますので、女中奉公などをしようと思ふ者はあなくなりしました。たまにゐましても、長くは臀が落ち着かず、一年もすれば帰つてしまひます。初は二十年、京都生れの駒は十三年、銀にしましても四五年はゐましたけれど、もうそんなことは昔の夢です。近頃のお手伝ひさんは、嫁入修業に半年か一年ゐたと思ふと、すぐに国元から「見合ひ」の話がありまして帰つて行つてしまふのです。(第二十回)

本作に登場する女中と異なり、昨今の娘は結婚のためにすぐに国元へ帰つてしまい、もはや女中と呼ぶことはできないということが説明されている。

千倉家の台所の用事をしてくれませう娘さんたちは、その後も入れ代り立ち代り、週刊新潮の「掲示板」などのお蔭で、

喜んで来てくれますので、磊吉たちは幸ひに不自由するところがありません。のみならず、希望者の中には相当な家庭の、優秀なお嬢さん方が多いのです。けれども、この人たちは所謂「お手伝ひさん」と呼ばれるもので、昔のやうな「女中」や「女中さん」ではありませんから、太平記の中に加へる訳には行きません。(第二十回)

磊吉は女中を呼ぶときは「すべて呼びつけに」にしていたのであるが、「二三年前に」千倉家へ来た「茨城生れの娘さん」を呼ぶときは「三重さん」と「さんづけにして」いる。「三重さん」は「お手伝ひさん」と呼ばれるもので、昔のやうな「女中」ではないため、「台所太平記」に加えることはできない。「女中奉公」をする者は千倉磊吉にとつて、すでに過去のものになつてしまつてゐる。週刊新潮の「掲示板」を見て集まるのは「嫁入修業」のお手伝ひさんであつて、主家へ「奉公」する女中ではないのである。

磊吉は今年(昭和三十七年)七月二十四日を以て数へ年七十七歳に達しました。(中略)越えて八月の七日には、特に昭和十年以来の因縁の深い昔の女中さんたちに招待状

を發しまして、はる／＼熱海まで来て貰ひ、同日午後六時から市内仲田の中華料理店北京飯店の階上日本座敷で第二の賀会を開きました。(中略)「ところで皆さん、お手を拝借」／＼と、和可奈の主人は立ち上つて音頭を取り、／＼「謹んで先生の健康を祝します、万歳」／＼シヤン、シヤン、シヤン、と手を打ちましてめでたくお開きになりました。(第二十回)

食を通じての女中との交流を描いてきた本作は、磊吉と女中との食事会の場面で終わつてゐる。このころの磊吉は「もうこれ以上著しい変遷を遂げることなく、かう云ふ風にして生涯を終へるのでせう」という心境になつており、「喜寿の賀宴」は喜びであるとともに、女中たちへ別れを告げているのである。本作の題名は、「女中綺譚」「台所物語」を経て、最終的には「台所太平記」に落ち着く。谷崎は「三三四歳」の頃に「太平記」を読み、次のような感想を持つてゐる。

南朝が敗れて再び武家の天下になつたばかりでなく、足利氏の治世は動乱つゞきであつたのに、「めでたかりし事どもなり」とはどう云ふ訳なのかと、不思議に思つた。⁽³²⁾

戦乱の世を描いている作品に「太平記」という題がついていることに谷崎は疑問を持ち、「太平記」という題名の作品が（動乱つゞき）の世の中を描くこともあり得ることを知ったのである。本作には「台所太平記」という題名がつけられているが、（台所）の（太平）を描く必要はないのである。

本稿の「はじめに」で言及した谷崎の書簡五通は、本作に登場する初や梅の出身地である鹿児島町の町宛に出したお手伝いさんの依頼状である。谷崎は初や梅のような女中を求めて書簡を何度も送るのであるが、〈嫁入修業〉を目的とし、裕福な家庭に育ったお手伝いさんしかいない時代において、主家へ奉公する女中など〈昔の夢〉であることは谷崎自身にとって明白であったに違いない。それでも〈昔の夢〉を追わずにはいられなかったであろう。

女中との交流を楽しみ、生きがいに行っている千倉菘吉、ひいては〈菘吉〉は私がモデル」と言う作者である谷崎自身の姿が描かれていると考えられる本作は、ユーモア小説に終わるものではない。本作は、食の現場である台所を中心として、ユーモアを交えながら、女中を見て抱く菘吉の慈愛の思いと女中がいた頃を追想する姿を描いている作品である。平野謙が〈しが

ない女中列伝にほかならない」と評した本作は、谷崎にとつて忘れることができない女中たちの〈列伝〉だったのである。

おわりに

本作は、谷崎にとつて最後の長編小説である。本作の第一回から第四回までは昭和三十四年から三十五年までにすでに草稿ができており、「瘋癲老人日記」の成立よりも早い段階で出来上がっていた。成立時期の違いはあるものの、菘吉と女中との交流の深淺について分析したところ、前半と後半とで相違はないことがわかった。また、第八回以前と第九回以降の滑稽味について考察したが、両者とも滑稽味のある描写がなされており、田辺、福田が述べるような相違点を抽出することはできないことがわかった。本作は、これまでの先行研究で指摘されてきたようなユーモア小説で終わるものではなく、菘吉が女中を見て抱く慈愛を描いている作品であると言える。

〔注〕

（1） 谷崎潤一郎「週刊誌は三度目」『谷崎潤一郎全集 第二十四卷』中央公論新社 二〇一六年三月

- (2) 野村尚吾『伝記 谷崎潤一郎』六興出版 一九七二年一月
- (3) (2) に同じ
- (4) 森安理文「台所太平記——映えの美学」『谷崎潤一郎あそびの文学』国書刊行会 一九八三年四月
- (5) 平野謙「ああ、「細雪」から二十年 谷崎潤一郎著『台所太平記』」『週刊朝日』五月一〇日号 朝日新聞社 一九六三年五月
- (6) 武田寅雄『谷崎潤一郎小論 生活理想と文学理想の融合点に生れた谷崎文学』桜楓社 一九八五年一〇月
- (7) (2) に同じ
- (8) 陳齡「翰香残し、文豪伉儷はいずこ——新発見資料：『台所太平記』を巡る谷崎潤一郎・松子の書簡」『Fukuoka Jo Gakuin University Bulletin. Faculty of International Career Development』Vol.3 二〇一七年三月
- (9) 谷崎潤一郎「日記(六) 自由日記 (昭和三十六年九月十九日) 昭和三十七年五月七日」『谷崎潤一郎全集 第二十六卷』中央公論新社 二〇一七年六月
- (10) 谷崎潤一郎「週刊新潮掲示板」『週刊新潮』三月一九日号 新潮社 一九六二年三月
- (11) 谷崎潤一郎 渡辺千萬子『谷崎潤一郎 渡辺千萬子 往復書簡』中央公論新社 二〇〇二年二月
- (12) 田辺俊建「谷崎潤一郎『台所太平記』集解——その成立と意義に就いて——」『イミタチオ』金沢近代文学研究会 一九八七年四月
- (13) 福田博則「谷崎潤一郎『台所太平記』——当初の意図と後の飛躍——」『日本文芸学』日本文芸学会 二〇〇五年二月
- (14) (12) に同じ
- (15) 伊吹和子『われよりほかに 谷崎潤一郎 最後の十二年』講談社 一九九四年二月
- (16) (15) に同じ
- (17) (15) に同じ
- (18) 谷崎潤一郎「日記(一) 自由日記 (昭和三十四年二月一日) 同年十月二十四日」『谷崎潤一郎全集 第二十六卷』中央公論新社 二〇一七年六月
- (19) 岸川俊太郎／千葉俊二「解題」『谷崎潤一郎全集 第二十二卷』中央公論新社 二〇一七年五月
- (20) 前田久徳「解題」『谷崎潤一郎全集 第二十四卷』中央公論新社 二〇一六年三月

(21) 谷崎潤一郎「日記(四) 自由日記 (昭和三十五年一月一日) 同一年十一月十八日」『谷崎潤一郎全集 第二十六卷』中央公論新社 二〇一七年六月

(22) (15) に同じ

(23) (15) に同じ

(24) 谷崎潤一郎「日記(七) DIARY (昭和三十七年五月八日) 同一年十一月二十四日」『谷崎潤一郎全集 第二十六卷』中央公論新社 二〇一七年六月

(25) 谷崎潤一郎「女中綺譚 (「台所太平記」草稿)」『谷崎潤一郎全集 第二十二卷』中央公論新社 二〇一七年五月

(26) (11) に同じ

(27) (12) に同じ

(28) (13) に同じ

(29) (13) に同じ

(30) 谷崎潤一郎「当世鹿もどき」『谷崎潤一郎全集 第二十三卷』中央公論新社 二〇一七年三月

(31) (30) に同じ

(32) 谷崎潤一郎「幼少時代」『谷崎潤一郎全集 第二十一卷』

中央公論新社 二〇一六年四月

※「台所太平記」の引用は『谷崎潤一郎全集 第二十四卷』(中央公論新社 二〇一六年三月)に拠った。また、引用に際し、ルビは省略した。

(いのぐち ひろし/本学大学院生)